



恥蜜

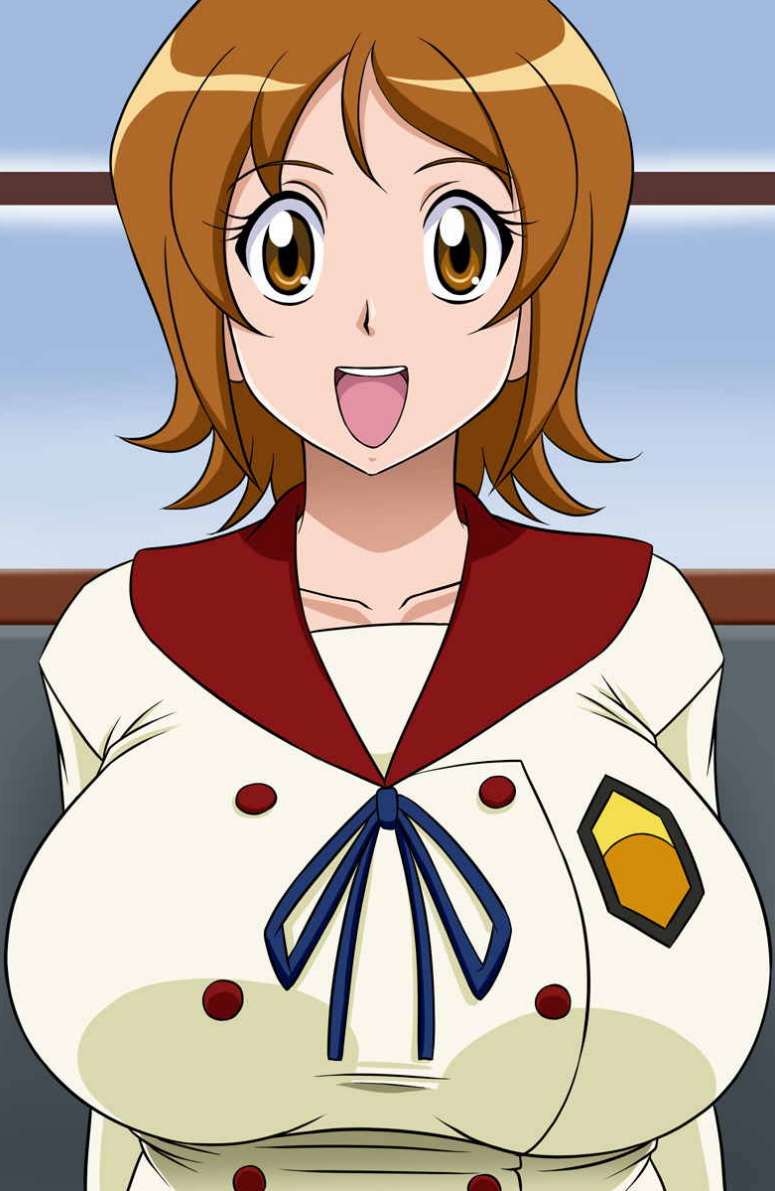
HONEY BOOBS

GLAMOUR WORKS

ADULT ONLY

幻影帝国を名乗る異形の集団が世界中を侵略し始めて、
はや数年……
彼らの超常の力には各国の軍隊も敵わず、ただプリキュア
と名乗る少女達のみが対抗できていた

ここはピカリが丘にある在日ブルースカイ王国大使館——
少女たちの間に流れる或る噂を辿って、ひとりの少女が訪れていた



「ボクに用があるのは君かい？」
応対に出た長身の男——大使館員というにはラフな服装——が少女に尋ねる

「はい！わたし大森ゆうこと言います！」
元気に答えるゆうこを男——実は地球の神ブル——は、じっと見つめた

「私をプリキュアにしてくださいー！」

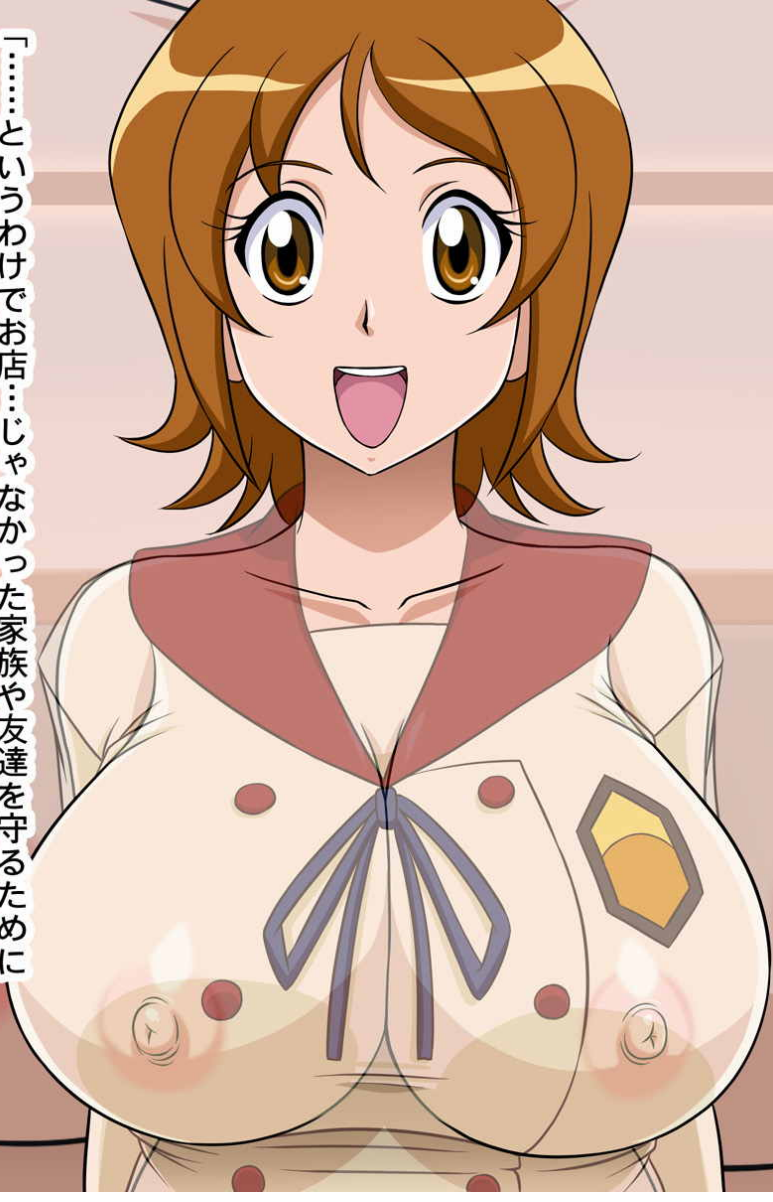
(…むっ！)
ブルーは内心呻いた。数多の女体を見てきた神の目をもってすれば服の上からでもプロポーションはおろか、乳輪の形すら判別できるその神の目から見てもゆうこは素晴らしい肉体の持ち主だったのだ(これは久しぶりの逸材だ！……)

「……というわけでお店…じゃなかった家族や友達を守るためにプリキユアになりたいんです！……あの？……聞いてます？」

「あ？…ああ、すまない。なるほど君の希望はわかった。だがプリキユアは、おいそれとなれるものじゃない。危険な目にも会う。その覚悟が君にあるのかい？」

「はい！大丈夫です！」
「ではいくつかテストさせてもらおう。まずパンツを脱ぎたまえ」

「へ？」





ぽろん

「ええ！？な、な、なんですかソレ！」
「プリキュアとして戦ってれば時には苦戦し、
あられもない姿を衆目に晒すこともあるだろう……
そんな時に君はどうするんだい？」
「そんなことで恥ずかしくて戦えなくなるのかい？」
「ボクひとりには恥ずかしい姿も晒せない程度の覚悟で
君は大事なモノを守れると言えるのか？」

「……わ、わかりました……やります！」
「よし、ではまずお尻をこちらに向けてパンツを
見せてもらおうか……」

「ふ、ふえええ」



ひゃ!

ぱりんっ

「こ、これでいいですかあ」
ゆうこは恥ずかしさに震えながらブルルに尻を突き出す
「ああ、そのまま動かないで」
ブルルは慣れた手つきでゆうこの下着をするりとずり落とした
「きゃあ!」
「ほら!動かないで!」
意外に厳しいブルルの叱責が飛ぶ
「は、はいい……」

(うむ、やはり思った通り尻のほうも素晴らしい!)
丸出しにされた熟れた白桃のようなゆこの尻を前にブルーは感嘆した

「……ま、まだですかあ……」
消え入りそうな声でゆうこが催促するが、ブルーの目はもじもじと尻を揺らすたびにひくひくと蠢く肉褻に注がれたままだった……



「ようやくのことでブルーの尻値踏みから解放されたゆうこであったが……」
「では今度は胸を出してごらん」
「ま、まだやるんですか……」
「この程度で音を上げるようではプリキュアにはなれないよ」
「……うう……」

「おや？ブラをしてないんだね」
「ぶるんと音がしそうな勢いでまるびでた双丘にブルーが驚く」
「は、はい……合うサイズのものがないから」
「恥ずかしそうにゆうこが答える」



「では今度は、その椅子に座って」
「パンツを脱がされ、胸をはだけさせたままのゆうこを促すブルー」
「プリキユアになれば身体的な能力は大きく増幅されるが、
痛みや衝撃をまったく感じなくなるわけではない。
君がどの程度の刺激に耐えられるかテストさせてもらう。
なに痛みは殆どない。だがなにが起きてても耐えるんだ。いいね？」
「は、はい……」



「人間というのは面白い道具の使い方をするものでね……」
「ブルーは電動マッサージ器を取り出すとゆうこの股間に押し当てた
小さく悲鳴をあげるゆうこ……」



「よく耐えたね。君には素質があるよ」
「あ、ありがとうございます……」
散々に股間を電マで煽られたゆうこが荒い息をつきながら答える
今までにない刺激を受けた秘裂からは、とろりと透明な蜜が滴っていた
「では最後のテストを行う。これに合格できれば君はプリキュアだ……」

「さあ力を抜いて……」
ブルーは己が分身を取り出すとゆづこの股間に突き立てた

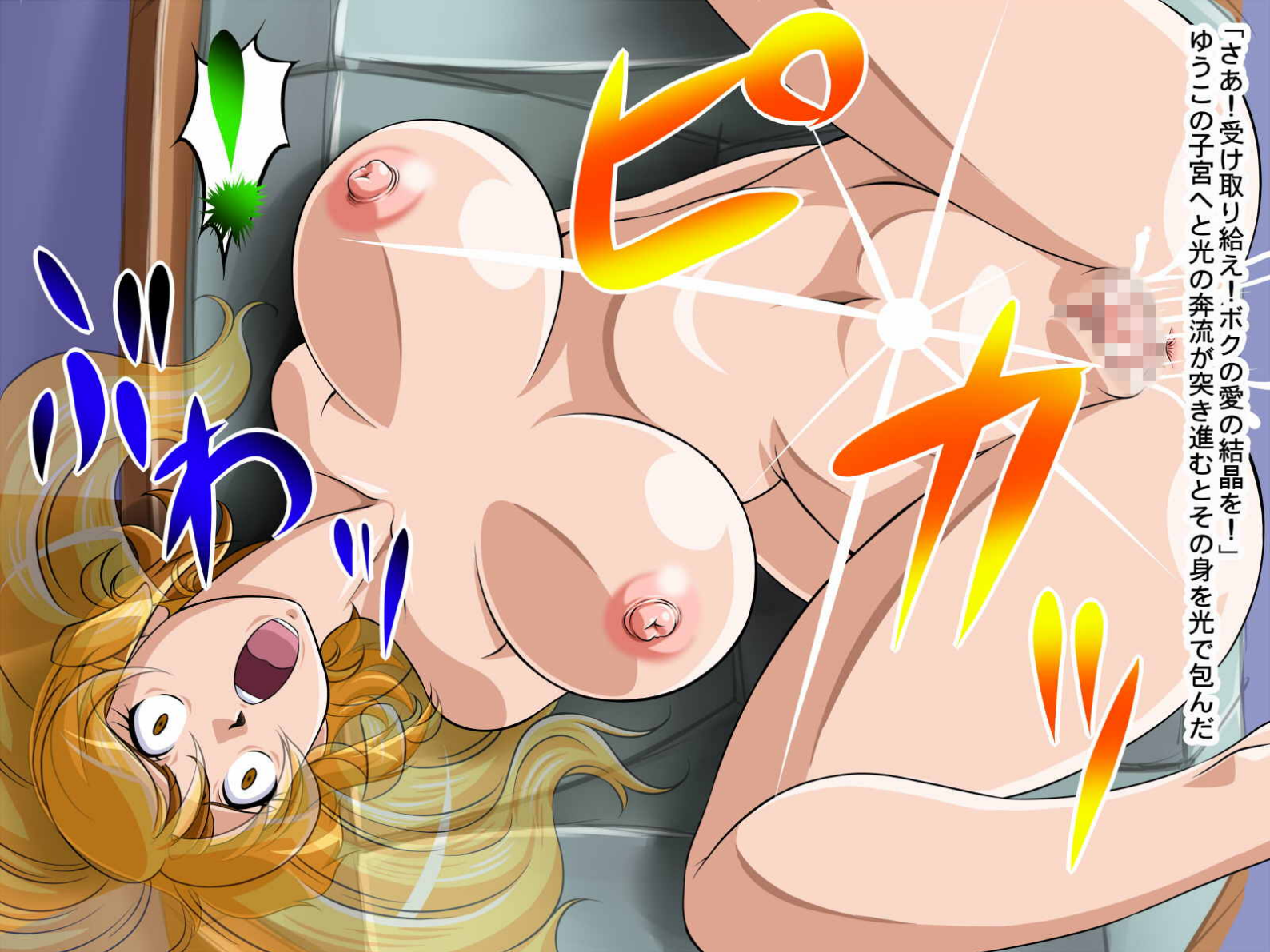


ゆうこの穢れを知らぬ秘裂をブルーの分身が
容赦なく抽出を繰り返し戻し蹂躪する
あられもない大声を上げ悶えるゆうこ





ブルーの腰の動きが一段と激しくなった。
本能的に絶頂が近いことを悟ったゆうこは身を硬くして身構える
「さあ！ボクを受け入れるんだ！ゆうこ君！」



「さあ！受け取り給え！ボクの愛の結晶を！」
ゆうこの子宮へと光の奔流が突き進むとその身を光で包んだ



ゆうこの髪が光り輝くと劇的に変化した
「おめでとー。これで君はプリキュアだ」
ブルーが声をかけるが変身と絶頂の衝撃を
同時に受けたゆうこは放心したように
ぐったりとしていた
「それにしても君の肉体は素晴らしいな。
久しく感じたことのない蜂蜜のような
甘い感触だった……蜂蜜……ハニー……
そうだ、今日から君の名はキュアハニーだ！」



「こ、こうですか？神様……」
ブルーの股間の分身をゆうこーキュアハニーが、その豊満な胸で
包み、しごきながら聞いた
「済まないキュアハニー……このところ多くのプリキュア達に
愛の結晶を分け与えてしまっていてね。君のコスチューム分の
エナジーが不足してしまった。もう一度愛の結晶を出すために
手を貸してくれたまえ」



「おっ！おお……も、もうちょっとでイキそうだもっど、もっと強くしごいてくれたまえ！」
「は、ハイ！」

はっ、はっ、はっ

ゲッ
ゴッ

カッ
ケッ

ゴッ



「くるりんミラーチェンジ！ポップコーンチア！
コスチュームチェンジしたキュアハニーは
チアガールの扇情的なダンスパワーで、
まずチヨイアイク達のエナジを股間に集める
これぞプリキュア・チン○ハードエクスプロージョンだ！」

こうしてプリキュアとなったゆうこは
キュアハニーとしてピカリが丘に攻め
寄せる幻影帝国との戦いに身を投じて
いくことになった



「さらにくるりんミラーチェンジ！ココナッツサンバ！」
再びコスチュームチェンジを行ったハニーは、
チヨイアーク達の股間を次々としごき始めた



「うふふ……もう、ひとりじゃ本当に手が足りないわね。
ほらそのアナタ、こちらの穴を使ってね」
「ちよ、ちよいっ」

ダンス効果で股間にエナジィを集められた
チヨイアック達はパニィに言われるがまま
に操られ、次々と腰を振り始める

ごいっ

しほめ

はっはっ

「ああん♡す♡おーい」
チヨイアーク達の怒張した黒棒を全身を
使ってしごきたてるハニハニは一体なにを
考えているのか……





「プリキュア・マラカスリズムスパーク！
今度はハニー自身が全身を揺るように
チヨイアーク達の黒棒をしごきたて始め

「ちよ？！チヨイー！ちよいいいいッ！」
突如としてチヨイアーク達が叫ぶや

「うっまんっ！」
ハニーの掛け声とともにその姿が次々と
白くなっていった
そうハニーは、まずはチヨイアーク達の
邪悪なエナジーを股間に集めるや、そこ
から一気に吸い上げたのだ！

まあ

ビィビィビィッ！

ちゅとぷん!

「さあ!仕上げね!命よ!天に還れ!」
プリキュア・スパークリングバトントニアタックが
抜け殻となったチヨイアーク達を殲滅する

「ふう……これで片付いたかな?」
そう「息ついた時だった……」



「貴様あッ！」

怒髪天を突く大声とともにハニハは背後から羽交い絞め…というか胸を鷲掴みにされた

ヒッ!?

どびゅん

ぐわしん!





あッ

びるん

「少女の憧れプリキュアとあろう者が
そんな淫猥な技で戦うとか
許されると思っているのか!!
いいや天が許しても俺様が許さん!!」
幻影帝国の幹部オレスキは、
そう叫ぶやいなやキュアハニーの
コスチュームを破りさる



「やれい！サイアーク！この破廉恥な女に思い知らせてやるのだ！」



サイアークにがつちりと抑えこまれたキュアハニー
なんとか抜けだそうともがくが、まるで歯が立たず
抱え込まれてしまう

ほ、放し
なさい

お、お、お

X様

お、お、お

〜ん

「貴様、先程は面白い技を使っていたな。もう一度やってもらおうか。このサイアークのイチモツでなあアツ！」
オレスキーが叫ぶやサイアークの股間からハニエの足ほどもある太さの黒棒がそそり勃った

じあ あん



無理矢理にサイアークの極太黒棒を胎内に挿じこまれ絶叫するハニー普通の人間であれば、腹を破裂させられて絶命してるところであるがプリキュアの強靱な肉体は、それに耐えた
だが限界を超えた変形は激痛となつてハニーを襲う



キュアハニーの哀願に応えるかのように
サイアークは極太黒棒を抜き始めたが……

ヒッ……もう
ゆ・許して……

あ……ア……

ブルブル

ズンズン

ズンズン





(もう少し……もう少しで抜けるわ……)
ハニーがようやく安堵しかけた時だった
サイアックは、再び極太黒棒でハニーの
胎内を抉りあげた

「どうした？さっきのようにやってみせないのか？」
オレスキーが嘲るように言うが、ハニーはただ
ぱくぱくと喘ぐのみでまともに言葉にもならない
「ははははッでは俺様が少し手伝ってやろう」
オレスキーは、ハニーの乳首を摘むと
無理矢理引っ張り、腹を突き上げる黒棒を
ハニーの肉ごとしごき始めた

アアッ
ああッ

ぬッ
救ッ
ッ

ギ
ゆう

ギョッ

Xキ... Xキ...





「おい!!こんなところで寝るんじゃない!!」
「激痛のあまり気絶しかけたハニー」を揺さぶり起こす
「サイアークよ、そいつをひっくり返せ」

おは

ハア
ハア
ハア

オレスキーに命じられたサイアークは
ハニの足を引っ張り回転させようとした
だが、ただでさえぎちぎちに詰まった
黒棒がすんなり回転するわけもなく、
腹肉を捻じられ引きちぎられるような
痛みに再び絶叫するハニ



ぎゅん!

ギョッ!

×キキ...

かやめこ

ぐぐ...

かちかち

かち!

×キッ

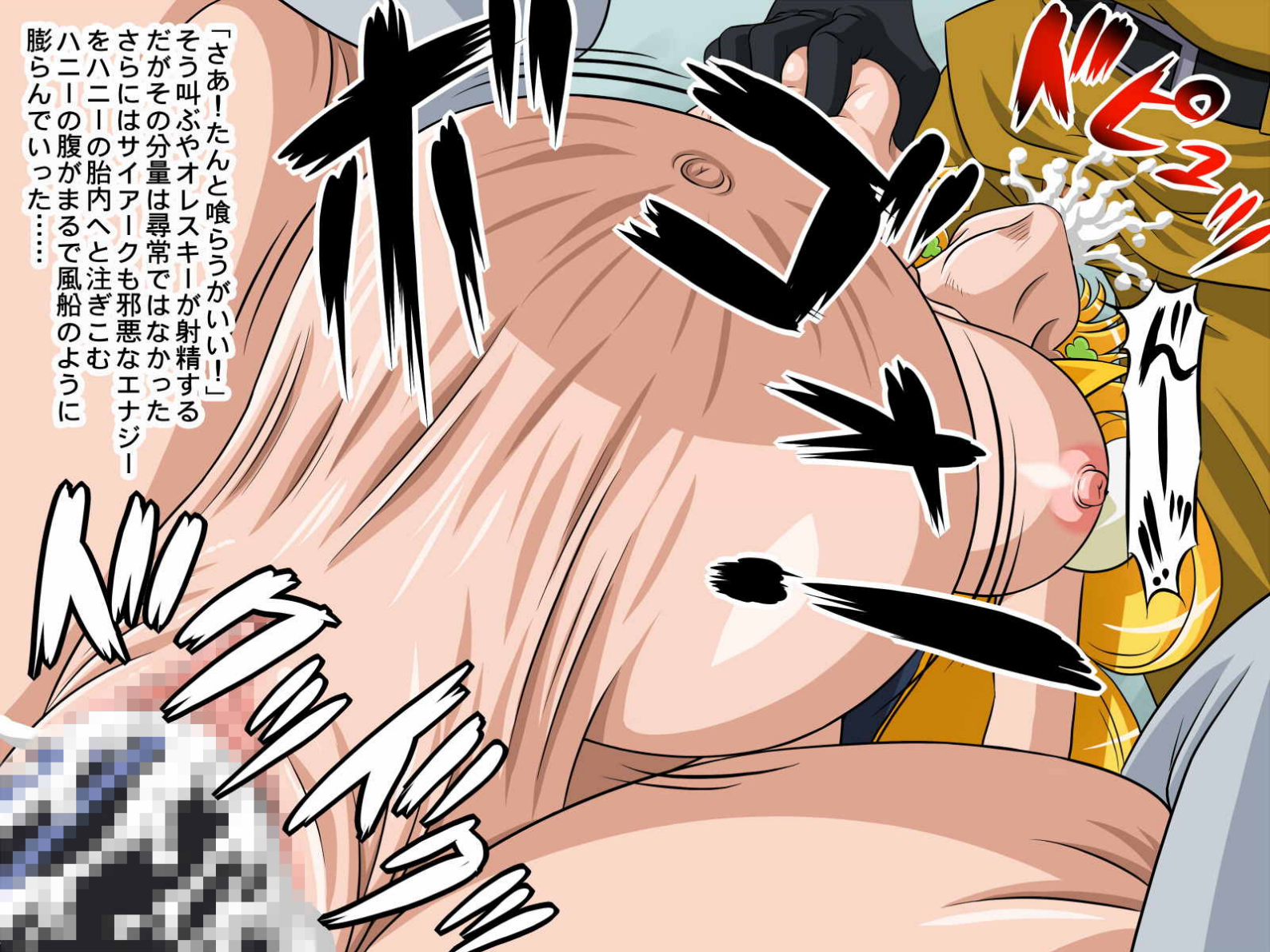
「ようやくのことで一回転させられたハニーの髪を掴んで引きずり起こすオレスキー」「どうやら貴様、サイアークのモノだけでは足りんようだな。ならば俺様直々に腹一杯食わせてやるからありがたく思えよ」





オレスキーは己の股間のイチモツをハニーの口に無理矢理押し込む

「さあ！たんと喰らうがいい！」
そう叫ぶやオレスキーが射精する
だがその分量は尋常ではなかった
さらにはサイアークも邪悪なエナジー
をハニーの胎内へと注ぎこむ
ハニーの腹がまるで風船のように
膨らんでいった……



「聞いておるのか貴様アツ！」

激昂したオレスキーのパンチがハニ川の腹に
めりこみ、ハニ川の股間からは白濁液が噴水
のように噴き上がった





「貴様どうやらまったく反省しとらんようだな！
いいだろっ！性根を叩きなおしてくれよう！」
だがその怒声はハニ川の耳には届いていなかった

「鏡に映る未来を最悪に変えろ！」

オレスキーの怒声をどこか遠くからの声のように感じながらハニーは絶望に呻く

（ごめん……みんな……）

……守れなかったよ

……相良君……）



